



土木系研究機関の 現況を さぐる

執筆者
および
座談会
出席者
(順不同・敬称略)

平井 敦
増岡康治
丹羽義治
滝山 養
中山道治

村上永一
岡本舜三
和達清夫
畑野 正
横山源次郎
山本隆一

会誌編集
委員会

<はじめに>

わが国では、古くから多くの識者によって、技術研究の必要が強く叫ばれてはいたが、広く世の共鳴を得ることができず、研究活動の面においてもその成果の面においても、常に先進国の後塵を拝してきたのは、まことに残念なことである。

ようやく近年にいたり、技術革新の風潮に刺激されてか、一般社会の技術研究に対する理解も深まり、にわかに研究施設の整備拡充が行なわれるようになってきた。

世界の大勢から見てやや遅きに失した観はあるが、ともかく傾向としては喜ばしいことである。資源のとぼしいわが国にとって、高度な技術を開発する以外は生きていく途はなく、基礎、応用を問わず、技術開発研究に対する期待はきわめて大きい。

しかし、研究活動を進めて行く上において、いまだ四囲の条件は決して良好とはいい難く、前途に山積する難問を解決するには、今後とも多くの努力が要求されよう。

この意味から、今月は研究活動はいかにあるべきかを考えることとし、最も身近な土木関係研究機関の現況、将来について、土木以外の方々をもまじえ、それぞれの立場から論じていただいた。

本特集にあっては、その頭初に<日本における土木系研究機関のありかた>について、そのビジョンを平井 敦氏にご執筆承わった。ついで本特集は、現在われわれが関係する各域の研究機関の現況とその問題点を、官公庁の場合、大学の場合、民間研究所の場合の三つの区分にしたがって述べていただいた。この三区分の仕方については、いろいろと意見のあるところであるが、今回は縦割りの区分法を採用した。また、大学の場合に関し、今回は研究所に焦点をしばったことから、学部での研究について次回にまわさせていただいた。

ついで、読売新聞社の中山氏をわずらわして<土木技術者よもっと大きな夢を>という主旨で、楽しく述べていただいた。また、併載の座談会は、昨年12月10日土木学会土木図書館5号室で収録したなので、研究機関の第一線で活躍する各位の貴重な意見はきっと会員諸氏の糧となると信ずるものです。

最後に登載した参考資料は、昨年から今年初頭にかけて研究機関に調査をお願いしたものを編集担当委員がまとめたものです。本欄の各所に、特集本文と重複する箇所もあるがご許し承わりたいと思う。

土木系研究機関はいかにあるべきか。読者諸兄におかれても、すでにご意見をお持ちのことと思う。

多くの方々の建設的な意見を結集し、ようやく固まりかけてきたわが土木界の研究体勢が、よりよき方向に前進するようつとめたく、本特集がいささかなりとも、その口火となってくれることを願う次第である。

この特集を編集するに際し、多くの方々から貴重なご意見をいただくとともに多大なご協力を賜わった。ここに誌上より深く感謝の意を捧げたい。また、立石、米田の両委員にも大変お世話になったので記して謝意を表する次第である。

会誌編集委員会